

愛の成立と自己の成立 : アウグスティヌスにおける 真理と自己の探求

澁村, 美貴子
九州大学大学院 : 博士後期課程 : 哲学

<https://doi.org/10.15017/1448751>

出版情報 : 哲学論文集. 42, pp.27-43, 2006-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

愛の成立と自己の成立

——アウグスティヌスにおける真理と自己の探求——

澁 村 美貴子

序

アウグスティヌスの哲学にあつて特徴的なのは、「真理 (veritas) への愛」と「自己の探求」とがほとんど同一のものとして重なってくることであろう。わたしたちの「在ること」の意味とその成立根拠とを問い求めるとき、「真理」が問題としてわたしたちに立ち現れてくる。

人は、生きている限り、「人間とは、自己とは何か、そして何であり得るか」を問うべく促されている。漠然と自分の将来について思いを馳せるときも、具体的な行為の場面で個々の選択を迫られるときも、そうである。そして、様々なものへと思いを向かわせるうちに、そもそも「このように問うているわたし、問い得るわたしは何者であるか」という、不知と知との狭間にある自己存在の謎を突きつけられることになる。

してみれば、「自分自身が自分にとって謎となる」とき、そのこと自体が自己探求の端緒となり得よう。そこにあつて、

人は、「わたし（問いの局外に措定された固定した主体）が外なる何かを問い求める」という対象化された図式を奪われ、問いが己れ自身に突き返されることになる。そして同時に、そのような図式を奪われてもなお己れを問い求めることができる、己れの不思議な在り方に気づかされるのである。すなわち、「自分自身が謎となってしまう」という思いに買かれるとき、「自分自身が謎となってしまった」とこと自体は、自分にとって確かである。謎かけられることと確かさとは、そこにあって単に矛盾してはいない。そのような不知と知との緊張を保持しつつ己れの存在の根源を問うてゆくこととして、わたしたちは真理の働きに対して何らかの応答していく、と言えるかもしれない。そして、これこそがアウグスティヌスの探求の歩みであったのだ。

本論の目的は、アウグスティヌスの探求の歩みを辿ることで、なぜ自己の仮初の主体性が揺るがされる場からはじめなければならなかったのか、また、先取りして言えば、それを探求の端緒としてだけでなく常なる道行き（via）として説かねばならなかったのか、そして、「真理への愛」と「自己の探求」がいかなる意味で真に結合してくるのかを、多少とも見定めることである。そうすることで、アウグスティヌスが見ていたであろう人間存在の可能性とその豊かさを垣間見、わたしたちもそこに多少とも与りゆくことができ、と願う。

一、 謎 という道

「いまや、自分自身が、自分にとって大きな謎（questio）となってしまった。」^[1]

これは、友の死に遭った悲しみのなかで発せられた、若き日のアウグスティヌスの言葉である。死が友を自分から奪い去り、探しても見出せない友の不在のなかで、この言葉が発せられたのである。

ここには、二重の欠如が見られる。それはまず、己れの拠り所が奪われたことによる、己れ自身の存在の欠如を意味した。

当時、アウグスティヌスはこの友に、「二つの身体における一つの魂」と言われるような一体感を抱いていた。それゆえ、友の死によって己れの魂の半分が引き裂かれるような感覚のなか、どこに自分の魂を置いてよいのか分からなくなり、己れ自身の行き場（生き場）を見失ったのである。²

さらに、そもそもこの友情自体が、欠如に基づいた友情であった。この友情は、アウグスティヌスがその友を引き入れたマニ教についての学の熱に温められたものであった。しかし、そのマニ教自体が、善悪二元論的な或る種の合理的体系を有しつつも、その実、迷信的な性格を帯びていた。³ 実際、アウグスティヌスは、死の床にある友からマニ教における交わりを拒絶される。友と共有していると思っていた友情は、自分と友とを結ぶものを欠いていたのであり、つまりは、虚構の友情であったと言える。

したがって、友の死による二重の欠如にあつて、彼は二重にみじめな人であった。己れの存在を寄り掛けていたものを失ったみじめさのゆえに、そして、己れが抱いた虚構の友情に己れの存在を寄り掛けていたみじめさのゆえに。しかし、それゆえに、友を失うことは、そのような虚構性から脱する機会にもなり得たはずであった。

ところが、アウグスティヌスは、友を失った後も、己れの虚構から脱し得てはいない。彼は、寄り続けることができなくなった友の代りに、悲しみに寄り縋ったと言つた。「ただ泣くことだけが、わたしにとって甘美なこと、友に代わる心の喜悅となつた」⁴。アウグスティヌスは、敵しい目で当時の自分を振り返っている。そして、友の死を悲しむ自分がある意味楽しんでいたのであり、「自分のみじめな生を友よりも大切なものと考えていた」⁵と告白する。つまり、彼は虚構の友情に寄り縋っていたうえに、さらに友の死にひとりよがりな涙を流すことで、ますます友から離れていった、と言えるかもしれない。虚構を虚構で埋めようとする彼は、そのように幾重にもみじめであった。

泣くことに甘美を覚えるアウグスティヌスの姿は、同じ『告白』第三巻に描かれている、かつてカルタゴで「悲劇を好ん

でいた」時の彼の姿と重なる。悲劇は、観客をより多く悲しませるほどよりよい出来であると評される。しかし、人は悲劇に溢れた悲劇を眺めて悲しもうとするが、自分が同じような目に遭おうとは思わない。¹⁶⁾

このような観察から、アウグスティヌスは、二つの「憐れみ (misericordia, 他者に対して抱く悲しみ)」、「すなわち「愛される悲しみ」と「忌避される悲しみ」があることを見出す。悲劇をことさらに楽しもうとする人は、自分で体験するのは固く嫌悪する悲しみを、舞台上の人物が受けるのを見て悲しもうと欲し、より多くの悲しみが舞台上で為されることを求める。そのような仕方では憐れな人を見て悲しむ者は、悲しみを感ずること愛の務めを果たしている点では、一応是認される。しかし、ほんとうに憐れみ深い人であれば、自分に悲しみが振りかからぬように願うのと同じように、人にも悲しむべきことがないように願うはずである。人の悲しさを取り除こうと願うのが、真に愛の務めである。¹⁷⁾

ここで説かれているのは、悲劇や舞台自体の虚構性ではなく、それを観る側の虚構性である。憐れみが「愛される悲しみ」となるか「忌避される悲しみ」となるかは、それが舞台上の人に向けられるものか現実の人に向けられるものかに拠るのでなく、その悲しみが如何なる仕方では受け止められるかに拠る。悲しみが他人事として捉えられ、「それによって自分の内に深く入ってゆく悲しみではない」とときには、「自分の皮膚の表面をひっかくような」表面的な悲しみとなり、その痛みを楽しむことができるようなもの(「愛される悲しみ」となるのである)。

以上、友の死と悲劇との二つの例から学ばれるのは、己れの虚構からの脱出は、ただ外的に虚構を排除することからは得られないということである。友の死の悲しみが甘美であったことは、友の死という切実な出来事であっても、それが己れ自身の問題として突きつけられぬことには、表面的で虚構的なものしか生み出さないことを示している。つまり、虚構の友情も愛される悲しみも、当時のアウグスティヌスが己れの「在ること」の意味を問うことなく、それゆえ、己れの「在ること」の意味基底が明らかでなかったことに、その虚構性の原因があったのだと言えよう。

むしろ、そのときアウグスティヌスは、「自分自身が大きな謎となってしまった」という思いに打たれたその瞬間に立ち止まるべきであったろう。なぜならば、「自分自身が大きな謎となってしまった」とは、問いが己れ自身へと、そして己れの存立の根底へと突き返された瞬間だからである。そこで、そうした瞬間に踏み留まりつつ自己を凝視したものとしてみなされてしまった」その己れ自身を、改めて超越へと開かれた問いとして受け止めた探求であった。

一、精神の自己知とその披かれた可能性

自己探求する精神 (mens) について、アウグスティヌスは次のことを語り出す。

「精神は自己を知らうと問い求めるとき、問い求める者としての自己をすでに知っている (quaerentem se iam novit)。……すなわち、そのとき精神は、自己が自己を問い求める者でありかつ自己を知らない者である、と知っているからである」。

アウグスティヌスは、謎である自分自身を問い求める精神において、なおも「わたしは自己を知らない者である」と知る。「自己知 (se nosse)」が在ることに注目する。この知の在り方は、様々な外的な対象についての知識とは異なる性格を有する。たとえば、知らない言葉を「すでに知っている」言葉からの推測や「すでに知っている」人からの教えによって理解するとき、わたしは「すでに知られた知」を土台としてそれを理解する。このような仕方では得られる知識は、わたしによって組み合わされたり、他の人とわたしの間で譲り渡され得るものであり、「わたし (主体) に対象的に所有される」ようなものであると言ってよい。これに対し、自己が自己にとって謎であるときですら精神に備わる自己知とは、諸々の対象的な知識 (専門知であれ常識知であれ) の場合のように、わたしが「主体として」在ること」が問いの局外に確保されたうえで、

何らか対象的に獲得していくような知ではない。

アウグスティヌスが語る精神の自己知とは、精神に部分的に獲得され附加されているような知ではない。かえてそれは自己全体が問いの内に置かれたときに現われる知であり、謎かけられ、謎に応答する者としての精神の自覚である。もしもこの知が備わっていないならば、自己を問い求めようとして自己でないものに向かうこともあり得るだろう。また、そうした自己知は、自己自身を問い求めるときだけではなく、たとえば「わたしが何かを問うている」、「わたしが何かを疑っている」と言い得るように、わたしがなんらかの対象的な認識を為す際にも、その根底に存している。

このような精神の自己知とは、問いを発し得る者としての人間（精神）のことであると見えよう。それは、人間としての本性的な知である。しかし、本性的と言っても、自己が問いの局外に置かれたときには潜在的な可能性として留まるのであり、実際に自己を問うて生きていくなかでその本性の可能性を現実化しなければならないのである。

アウグスティヌスは、この点、「自己を知らないこと（non se nosse）と自己を思惟しないこと（non se cogitare）とは別である^[1]」と言つ。それは、「問い求め得る」という自然・本性（natura）を与えられた者として生まれ、しかし、その自然・本性を実現させるべく自らの生を歩みゆかねばならない、未だ途上としての人間の在り方を強調するものである。つ。いふならば、人間はそのような本性を種時かれており、しかし、その種が芽吹き花開かせる（存在の充実）か枯れてしまふ（非存在への類落）かは、未だ決していない^[2]。そして、人間本性は、その両方向に、自らの自由・意志によって披かれているのである。そこに、人間的自由が謎として垣間見えてこよう。

そこで、先の『告白』の「自分自身が大きな謎となつてしまった」場面を反省してみれば、その思いに打たれた瞬間、アウグスティヌスは「わたしは自分を知らない者である」と知り、自己の本性の実現へと一歩踏み出したのだと言える。しかし、その後になおも己れの虚構から脱け出せずに虚構の悲しみに寄り縮つたことは、自己を問うて生きてゆくことの困難を示している。すなわち、精神は、己れの本性を実現させる方向にのみ披かれているのではなく、逆に、己れの「在るこ

と」の欠乏を招く方向にも披かれている。自由に意志し行為する志向的な姿として自己の本性を表現させ得るといふことは、逆に、己れの虚構のなかに己れを陥らせる可能性をも伴っているのである。両方向に披かれた人間の自由・意志は、ここにおいて、存在論的要諦ともなってくる。すなわち、「誤った愛ないし意志によっては、人は自分が自分で在ることをも失いかねない」のであり、人間は己れの意志を介して、「在る」と「在らぬ」との狭間に生きているのである。

しかし、好き好んで己れを失おうとする人は誰もいないのであるから、なぜ「在らぬ」への類落が容易に起こり得るのか、なぜ虚構の友や涙が自分にとって甘美なものになるのが容易であるのか、という問いは、アウグスティヌスにとって切実な問いであった。途上としての人間の在り方が抱えるこのような問題は、自己を問い求めるときに自己のみを見つめることができない「人間の病 (aegritudo)」として抉り出される。

三、転倒した意志・志向と、存在の類落

(一) 愛の結合力

意志的な病の内実を表すものとして、次の表現が注目されよう。

「愛の力はあまりに大きい。それは、精神が愛によって長い間思惟し、思いの膠によってそれらに寄り纏っていたものを、今度は自己を思惟すべく何らかの仕方で自己に立ち返るときですら、自己と共に連れ込んでしまうほどである」⁽¹⁵⁾。アウグスティヌスは、諸々の対象への強い志向において、その対象となるものと精神との間に或る癒着が生じることに注目する。精神は感覚を通して、いわば自己の外側で対象と関わる。しかし、その対象に心を留め置くときには、自己の内側に対象の似像・心象 (imago) を抱え込む。精神は、そうした似像を形成するとき、自己の実体の或るものを (quiddam substantiae suae) それびに「えつてしまふ。つまり、精神が何らかの対象にことさらに執着して思いを注ぐときには、その

対象は精神にとって単に外なる対象としてではなく、志向の対象に精神が癒着したものとて愛され意志されているのである。⁽¹⁶⁾

わたしたちにあつてこの癒着は余りに強く、知覚された事物の似像から自己だけを区別することができないほどである。⁽¹⁷⁾にも拘わらず、そこから自己のみを見出そうとするならば、結局、自分自身が形成したもの (imago) を自己であると思ひ誤つてしまふ。その際、いわば意志的志向の痕跡である諸々の事物の似像は、精神の実体の或るものを与えられているとしても、しかし、それは精神の或る側面に過ぎない。それゆえ、自己を問い求めようと自己の内を目を向けたとき、自己の内を抱えたこうした似像・心象から自己を見出そうとするならば、その似像と癒着した自己の或る一側面を見出すことができたとしても、しかしそれは、様々な附着物によって曇らされた自己なのである。

もとより、わたしたちは自由・意志を持つ者として、日々様々な事物に関わり、様々な似像・心象を形成し、それを抱えながら生きていく。確かにそれは、わたしたちの生を豊かなものともする。アウグスティヌスは、そのような愛・意志の働き自体を否定しているのではない。そうではなく、精神が自己を問うときに、このような諸々の似像に愛・意志を向けることによって、自己の或る一面をしか見なくなり、或る意味で自己自身を不問に伏せてしまふことを警戒するのである。そのようなときには、様々なものや人と豊かで生き生きとした関わりを結ぶことなどできようか。

それゆえ、愛・意志の働きは、自己と自己でないものとの何らかの結合や癒着を生みはするが、その結合の力自体が、精神が自己のみを見つめることができな原因ではない。むしろ、原因は、精神が自己を問い求めるときに、この愛・意志の力を誤った仕方である (＝悪しく) 用いてしまふことにある。

(二) 精神のものの化

アウグスティヌスは、自己を問い求めるときに悪しき仕方である愛・意志の力を用いる人々について、次のように語っている。⁽¹⁸⁾

自己を問い求めるとき、精神は自己が自己を問い求める者であると知っている（このときは、自己は問いの内に置かれている）。しかし、「では、そのように意志し志向する力はどこにあるか」と自己の内に問い求める人は、自己の中でその力を一番強く担うと思われるものを「精神」であると看做すようになる。そこで或る人は、自己の部分、つまり脳や血あるいは心臓を、さらにはその構成要素を求めて、原子という極微で不可分の小物体の集合や凝集、あるいは空気や火を、精神の実体であると考ええる。また、或る人は、「精神」とはそのような物体ではないと考え、しかし同時に、物体以外の実体など考えることができなかつたために、実体なきもの、たとえば身体（corpus）の組織や要素の複合・調和を、あるいは物体（corpus）を生かす生命を、精神であると考ええる。

さて、こうした人々は各々異なる立場を取っているかに見えるが、しかしその根は同じであるとアウグスティヌスは言う。彼らはみな、精神の働きを基体（subjectum）の内に在るものと看做そうとしている点で一致しており、その点で誤りを犯している。なぜなら、「精神」を、「志向する力を担う自己の部分」であると看做した時点で、自己自身は「精神」を有する器（＝基体）として問いの局外に置かれてしまっているからである。そして、その結果、彼らは自己を捏造する。すなわち、自己の働きを自己の部分に癒着させ、「意志し志向する力を担う脳、空気、生命」等々というものを自己の内に作り出すのである。

ここには、或る転倒が生じている。彼らは、自己自身を問い求めていたはずであるのに、「精神」と呼ばれる自己の一部を見出すのである。したがって、いくらそれらを「精神」という言葉で捉えていても、結局は、自己（精神）を物体・身体であると思い込んでいる（corpus esse se putat）ことになる。こうした事態は、いわば「精神のもの化」と言うことができよう。

それゆえ、あらゆる立場の人々が、精神を物体・身体であると思ひなす誤りに陥り得る。たとえば、「精神」を「知解する力」であるとか「想起する力」であると言ったとしても、また、何かを創造し得る「神的な力」であるなどと言ったとし

ても、それを自己の所有する部分であるかのように看做している限りは、自己をもの化していることになるのである。

(三) 誤った愛・意志と、本性の枯渇

自己を問いつつも、もの化してしまふ原因は、自己を問うときに、意志し志向する自分の力に不正に執着しようとする欲求 (cupiditas, 誤った愛) にある。といふのも、そのような仕方では自己を見出そうとする人は、次のことを無視しているからである。すなわち、「何かを意志したり意志しなかつたりするとき、その全体が自己であり、また、何かを意志して誤りに陥るときも、その全体が自己である」⁽²³⁾。「ここにアウグスティヌスが問い求めているのは、意志し志向する力を担う自己の或る部分などではなく、精神を部分であると看做してしまっている人にもなお見出されるような、精神に内在する或る確かさ (certitudo) である。

たとえば、自己を問い求め、「精神は空気である」と考える人も、「自己を問い求めているのはわたしである」と確かに知っている。これに対し、「精神が空気である」とは、知っているのではなく思いなしているに過ぎない。それゆえ、もしも彼らが自己について思いなしていることを一つ一つ取り除いてゆくなれば、自己について確かなこと、つまり、自己を問い求めているのは確かに自己自身であるといふことが、疑い得ないこととして残されるであらう⁽²⁴⁾。そして同時に、「精神は空気、脳等々である」と思いなしたのは自分自身に他ならず、自己についての誤謬は、まぎれもなく自らの意志的な働きによって自ら作り出したものだと思ふべきであらう。

しかし、自己を問うときに、そうした全体としての自己の在り方を無視する人は、自らの意志的な働きによって、次のような悪循環に陥っている。

「精神は、自分の力を愛し、それに執着することによつて、私的な部分へと (ad privatam partem) 滑り落ちる。……

精神は、何らかの部分欲し、それを自己で律して支配せんと意図したとき、結果的には、かえつて部分的なものへの

気づかいへと追いやられる。そのようなものを熱望すればするほど、精神はますます小さくなる⁽¹²⁾。」

意志し志向するという自分の力に不正に執着する人は、自己を分裂させる人である。なぜなら、彼らは、「意志しない」とか「意志によって誤りに陥る」などといった自分の面を、「精神」から切り離そうと欲するからである。そして、そのように部分化した「精神」を用いることによってより力ある者になろうと欲し、「精神」の力で如何に多くを獲得できるかに夢中になり、その力にますます執着する。ところで、実際には、彼らが「精神」であると看做しているものは、人間（精神）の働きの一側面を癒着させて自分が形成した或る似像・心象に過ぎない。つまり、彼らは、そのような似像にさらに色々なものを附加し、いたずらに膨張させているに過ぎないのである。しかし、自分ではより力ある者、「在ること」のより大なる者になっているつもりであるから、膨張すればするほど、ますます自らの犯している誤りに気づき難くなっていく。そのとき、彼らは自己を問うことからますます離れてしまっているのであり、虚構を塗り重ねていくことによって、己れの「在ること」はますます小さくなっていくのである。

このように、自己を全体として見ず、その結果、自己を問いの局外に固定し置き去りにしたまま外なる対象を獲得しようと欲する精神は、次第に自らの附加した誤謬に満たされていく。そのとき人は、意志し志向する力に執着しながらも、実はその力をみくびっているのだ。なぜなら、「意志し志向する力」は、意志する者をかえて無力にする力をも有するからである。にも拘わらず、その力を自分が支配し律するかのように思いなす傲慢（*superbia*）によつては、その力を用いるほど、ますます無力で小さい者になっていくのである。自己に突き返されることの無き志向は、いくら外に広げられたとしても希薄な交わりしか生まないのだということを、わたしたちは反省しなければなるまい。

したがって、自己を問い求めるとき、愛・意志の力がただ一つの道に導かれているのだと思い込み、自分の力を過信するならば、自分で自分を捏造し、その虚構の中に落ち込んでしまう。アウグスティヌスは、この点を次のような簡潔な表現で語っている。

「自己の権能を試そうとする誤った欲求によつては、いわば中間点 (medium) としての自己自身へと落ちてしまふ⁽²⁾」。確かに、「自己を問い求め得る者」としての自己知とは、人間である限り備わる本性的な知であり、「問い求め得る」力は、人間の大切な能力である。しかし、それは、ただそれだけでは潜在的な可能性に過ぎないのであり、善き方向に向うか悪しき方向に向うか分からぬ「中間点」でしかない。すなわち、自己に内在する可能性たる自己知は、善く意志するか悪く意志するかによつて、より善く実現することもあれば、逆に枯渇してしまふこともあり得るのである。

以上のように、自己をいかなる仕方でも問ひ求めるかという愛・意志の問題は、自己の「在ることの充実」か「非存在への類落」かという自己存在の問題と密接に関わっている⁽³⁾。そして、「ここで語られる」在ることの充実とは、自己に何かを附加していくことではなく、自己に潜在的に備わる可能性をより善く顕現し開花していくことであつた。そこで最後に、アウグスティヌスにおける自己探求の持つそうした意味の広がりを探え、人間本性をこのように説くことによつて、人間存在のどのような豊かさが開かれてくるのかを見よう。

四、人間本性の開花、すなわち、「在ること」の充実へ

アウグスティヌスは、意志し志向する力をより善く用いることによつて本性が開花する道を、「精神が善き精神になること」として述べている⁽⁴⁾。そこに、「在る」と「善い」との根本的な関わりが顕わになつてくる。

「善い精神」は、「精神」と「善い」という二つの言葉の結び付きとして語られる。すなわち、「善い精神」と言うとき、二つ「こ」が、つまり、精神 (animus) と善い精神 (bonus animus) とが区別なされているのである。それは、次の理由による。精神の「問い求め得る」という自己知 (se nosse) は、それ自体確かに善いものであり、人間としての大切な本性である。しかし、ただ人間として在ることに甘んじて、己れの本性を善く用いようとしなければ、「精神ではあるが、善い

精神ではない（人間ではあるが、善い人間ではない）のであり、批難されるのは正当である。善い精神であるためには、自己の愛・意志をより善く働かせなければならぬ。悪しき愛・意志によつては、本性として与えられた善さまでもが、虚構や傲慢という悪しき方向へと働いてしまつからである。

ここに至つて、「自己を知らないこと (non se nosse) と自己を思惟しないこと (non se cogitare) とは別である」という意味が明らかとなる。自己思惟とは、自己知の開花であり、善く意志することによつて本性がより善く実現・開花した姿（＝善い精神）を示すのである。単に自己を問つ、自己について考えるというだけでは、未だ中間点でしかないのである。

精神と善い精神との区別から、アウグスティヌスは、さらに次のような点へ注意を促す。自己を悪しく愛し意志することによつては、自己でないものを自己に附加していくのであり、それゆえ、誤謬の原因は自己自身にある。これに対して、自己を善く愛し意志することによつては、潜在的に備わっていた自己の可能性が顕現してくるのであるが、しかし、端的に自己自身が善い精神の原因であるとは言い難い。そして、こうした善い精神の原因ないし根拠を凝視するとき、アウグスティヌスの問い求める「真理 (veritas)」が、まさに問題として顕われてくる。

「*igitur, veritas est bonum*」がある。……すなわち、精神は善い精神にならなければならないために、精神がそれによつて精神たるところのもの（＝真理、善）へと回心するのである (*convertit ad hoc a quo habet ut animus sit*)。意志の回心によつて善が愛されるそのときに、意志は本性に相応しく働き、精神は善において (*in bono*) 完成される。⁽³⁷⁾ここに、「真理」「善」は、精神の本来の成立根拠として、かつまた、意志の回心による善い精神の成立根拠として語り出されている。真理、善と人間とのこのような関わりは、アウグスティヌスにあつて極めて慎重に表現される。「真理において、善において」という言葉は、「内的にわたしたちにおいて (*intus apud nos*)」、あるいはむしろ、わたしたちを超えて (*supra nos*)⁽³⁸⁾とも言い換えられている。また、真理探求について、次のようにも述べられる。

「真理とは何か (quid est veritas) 」と (対象的「 Γ 」) 問うてはならない。そのような仕方では問うときには、直ちに、
物的な心象の霧と虚構の雲とがあなたを遮ってしまふ。……真理、と語られるとき、いわば電光によつてあなたが捕
えられるその瞬間に、できるなら留まるがよい。」¹⁰⁾

以上の考察から、基本線として次のことが確認され得るであろう。アウグスティヌスにあつて真理探求 (= 愛智) とは、
自己に何かを附加していくのではなく、むしろ、そのようなものを取り除いていくことを通して、自己の本性をより善く開
花させていくことであり、精神のより善き自己探求と重なる。人間にとつて、「真理とは何か」(の本質) は知られ得ないと
しても、しかし、真理の働きに貫かれ謎かけられて、真理を問い求めゆくことはできる。「自分自身が自分にとつて謎となつ
てしまつた」という思いに貫かれる瞬間とは、いわば、自己の「在ること」の成立根拠たる真理と自己との生き生きとした
出会いの瞬間なのである。そして、自己探求とは、真理に謎かけられ真理を愛し問い求める、その自己自身を凝視すること
であつた。その意味で、自己を謎として受け止めることは、自己探求の端緒であるだけでなく、常なる道行きでなければな
らない。

したがつて、そこに顕われてくるわたしたちの「在ること」の充実とは、「善い何かを」獲得していくといふことではな
く、むしろ、「より善い仕方」で「受け容れることができる」といふ豊かさである。それは、個々の行為の選択といふ場面か
ら捉えるならば、単に或る規準から選択の対象を善いと断定することではない。むしろ、そのように判断する自己と根拠と
を問い、その根拠が自己により善く顕現してくる (= より善い精神になる) ときにはじめて、わたしたちはより善く選択を
為すことができよう。これに対し、友であるつと学問であるつと、どのような一見善いものを選択したとしても、もしもそ
のものを自体にことさらに執着してそこで問いを閉じてしまふならば、その選択は悪しき方向へと働くことにならう。「 Γ 」に
「何を意識し志向するか」といふ問題は、単に対象の問題ではなく、むしろ、「いかに」問い求めるか、内在的かつ超越的な
善の働きにいかに応答してゆくかといふ自己自身の問題となるのである。

最後に、真理と自己との問題は、人と人との関わりにおいてより切実に現われてくる。たとえば、他者が受ける悲しみを自己とは関わりないものとして捉えるならば、それを楽しむことすらできる。しかし、他者が受ける悲しみや喜びを、自己がそれを受けるのと同じく同苦と共感でもって受け止めることができるならば、己れが嫌悪することを他者に為すことはできないだろう。この意味で、より善く意志し志向するとは、己れの感受性をより善く開くことであるとも言えよう。⁽²⁾ そこには、世界・他との対象的対立的ではない、より豊かな関わり方が開かれているのではなからうか。それは、相手を「所有し、支配し得る」という接し方ではなく、「愛し、問い得る」という接し方である。たとえば、友が善き行いを為すときには、もちろん友を愛し得る。しかし、友が悪しき行いを為すときにも、それを嘆き、友がその悪から脱け出さんことを願う。(3)このとき、友に対して流される涙は、苦い涙であり、ひとりよがりではなく真に相手をもった涙である。(4)つまり、このような関わり方においては、わたしがどのような状態にあっても本性の善き可能性そのものが奪い去られてしまうことがないのと同様に、友が善き状態にあっても悪しき状態にあっても、その友への愛は、あるいは共に喜ぶ愛、あるいは相手のために悲しむ愛として、わたしから奪い去られることなく存するのである。⁽⁵⁾それは、あらゆる他者が隣人となる瞬間である。そして、他者とのこのような関わり方は、自己と同様に他者をつねに存在の謎・神秘を孕んだ存在として受け容れることを、わたしたちに要求するのである。

註

- (1) Augustine, Confessiones , 9.
- (2) Ibid. , 11-12.
- (3) Ibid. , 7.
- (4) Ibid. , 9.

- (5) Ibid. , , 11.
- (6) Ibid. , , 2.
- (7) Ibid. , , 3.
- (8) Ibid. , , 4.
- (9) Ibid. , , 5.
- (10) 精神の自己知は、原文では「se nosse」のほか、「notitia mentis」と名詞としても記される。しかし、「問い求め得る者」としての知という意味を正しく表すために、本論では動詞として「se nosse」と記した。
- (11) Augustinus, De Trinitate , , 10.
- (12) 川力伝 8章 5-8
- (13) Augustinus, De Trinitate , , 7.
- (14) Ibid. XI, , 1.
- (15) Ibid. , , 10.
- (16) Ibid. , , 7.
- (17) Ibid. , , 11.
- (18) Ibid. , , 9.
- (19) Ibid. , , 15.
- (20) Augustinus, Confessiones , , 5.
- (21) Augustinus, De Trinitate , , 13.
- (22) Ibid. XII, , 14.
- (23) Ibid. XII, , 15.
- (24) Ibid. XII, 11, 16.
- (25) 愛・意志と自己存在とのこのような関わりを論じたものとして、

William S. Babcock, "Cupiditas and Caritas: The Early Augustine on Love and Human Fulfillment", in his *The Ethics of St. Augustine*, Scholar Press, 1991.

谷隆一郎 『アウグスティヌスの哲学』 創文社 1994, pp.129-166, 217-230. なま

(26) Augustinus, De Trinitate , , 4-5.

なま' Jの箇所では' 精神は「mens」ではなく「animus」が用いられている。Jの11の語は' アウグスティヌスにおいて厳密に区別をなすために「精神」と訳を統一した。

(27) Augustinus, De Trinitate , , 10.

(28) Ibid. , , 5.

(29) 『三位一體』におけるJの中心な問題を取り扱ったものとして

Walter, H., "The Dynamism of Augustine's Terms for Describing the Highest Trinitarian Image in the Human Person", *Studia Patristica* 17, 1993, pp.1291-1299.

(30) Augustinus, De Trinitate , , 13.

(31) Ibid. , , 3.

(32) Henry Chadwick, *Augustine*, Oxford University Press, 1986. (『アウグスティヌス』金子晴雄訳、教文館、2004) は' アウグスティヌスの哲学における真理・善と感情との関わりを描いたものとして引用された。

(33) Cf. Augustinus, De Trinitate , , 11.

(本学大学院博士後期課程・哲学)